

【特別講義要旨(2)'92.11.13】

## 「対日経済封鎖」と今日の世界

池田美智子

(東海大学政治経済学部教授)

今後の世界の発展と人類の福祉の向上を願うことは私達すべての願いである。今日までの世界経済の発展をかえりみれば、現在の開発途上国の経済発展は、この願いの実現化を大きく左右するものである。その観点から、一つのアプローチが浮かびあがる。

世界経済の発展は、歴史的に比べた（相対的な）経済後発国の「追いつき」過程でもある。ある相対の後進国がその先進国に「追いついて」世界市場に参入して行くとき、そこには先進国の国際的産業分野での貿易摩擦が生じる。1926年から1937年にかけて、当時の開発途上国の先頭をきっていたのは日本であった。当時の日本を焦点として、世界中が、壮大な苛酷な保護主義の実験をした歴史がある。

当時は、それまでの世界の秩序の中心的役割を担っていた大英帝国の権力が相対的に衰え、世界のリーダーシップが米国へと移っていった時期である。日本は西欧先進諸国に「追いつく」努力を重ね、世界市場へ参入し、その競争によって、古い世界秩序の破壊に拍車をかけた。

世界大恐慌が深まり、世界貿易がどん底へと沈みゆき、保護主義が世界を覆いつつあった頃、日本経済の回復力は速く、各先進諸国と比較して輸出が伸びた。日本は、先ず中国市場から追われ、対米輸出はこの期間に半減した。大英帝国では、帝国特惠が強化され、カナダ、英領印度、オーストラリア市場と、次第に日本の輸出は厳しく制限され、交渉の末に結んだ新通商条約はすべて日本の譲歩を強めていくばかりであった。ついで、蘭領印度、中近東、アフリカ、最後にラテン・アメリカ市場と、次々に対日貿易差別が公然化した。これが当時の後発国日本をして、死にも狂いの第二次世界大戦へやがて参戦する一つの要因となった。

現在も、世界が大きく変革しつつある。旧ソ連の崩壊後に、救援を要する貧困、低開発途上諸国、民族間の紛争、地球環境等など、新たな問題がふきだし、新秩序の光はまだ見えない。各国とも自分を護るために、政策は国内優先、貿易は保護主義、また自国を中心とする領域の活性化をはかるに必死で、域外差別を含む経済ブロック化を志向する。

このような時に、かつての対日経済封鎖の分析の結果明らかとなったことは、これからの世界と日本の生き方について、示唆するところが多い。

### 参考文献

池田美智子「対日経済封鎖」日本経済新聞社、1992 Alexander Gerschenkron, *Economic Backward-*

*ness in Historical Persoective*, 池田美智子訳「経済後進性の史的パースペクティヴ」東洋経済新報社  
刊行予定